仏事・年中行事の知識と作法

お盆と施餓鬼

佐脇貞憲（京都府加茂町・海住山寺住職）

まもなくお盆の季節がやってきます。お盆にはさまざまなところでいろいろな行事が行われます。お盆といっても、新暦・旧暦・月遅れなど地方の風習や習慣により日時や内容もさまざまです。

●お盆の由来

お盆は、真夏の暑い日に亡きご先祖が我が家を訪れる、仏さまの里帰りの日でもあります。お盆の語源は「ウラバンナ」という「地獄で逆さずりにされている苦しみ」を意味するインドの言葉で、それが漢字に当てられ「盂蘭盆」となり、さらに縮めて「お盆」と呼ばれています。

お盆の供養は、餓鬼道に落ちているかもしれない先祖への供養とされています。餓鬼道とは、欲しい欲しいと思っても食べることができない世界です。

ある時、お釈迦さまのお弟子で神通力第一といわれた目連尊者がその神通力で母親の姿を見たところ、餓鬼の世界で苦しんでいました。目連尊者は母を救うため、お釈迦さまの教えにしたがい供養をされました。そのおかげで餓鬼道から救われた、という『仏説盂蘭盆経』の故事に由来しています。

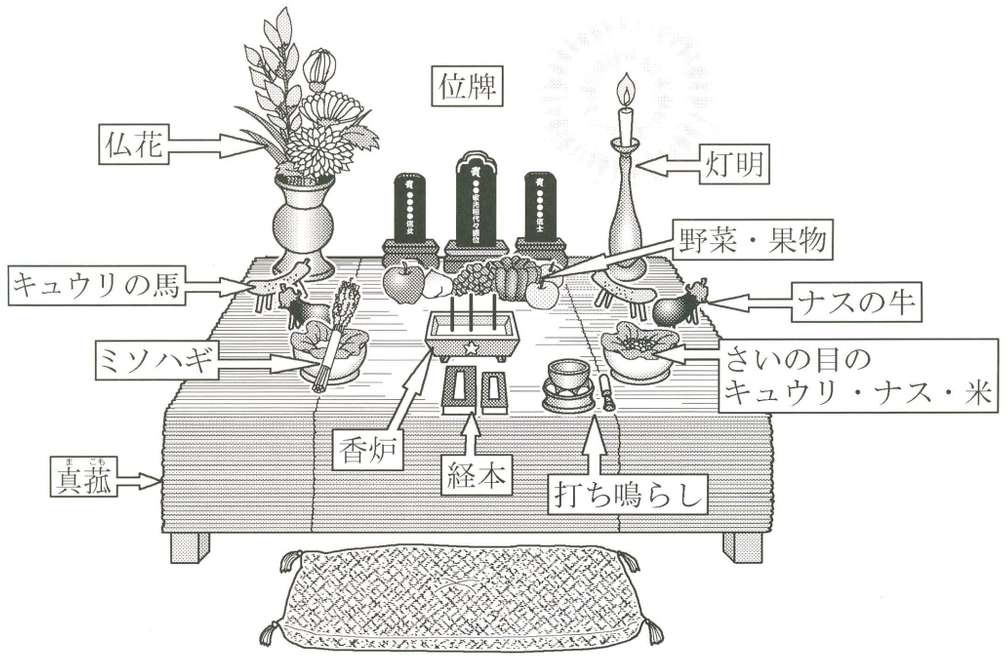
●精霊棚

お盆には各家々で精霊棚をしつらえ、ご先祖に供養します。例えば家に遠路わざわざ訪ねてくるお客さまがあると、たぶん皆さまは部屋を掃除し花を飾りお茶やお菓子を用意して、迎える準備をされるでしょう。それと同じく、お盆は年に一度遠いところからご先祖が訪ねて来る日なのです。

訪ねて来たご先祖がゆっくりお休み頂けるように、と準備するのが精霊棚です。準備が終わると、提灯を灯しお墓の近くまで行き迎え火を焚き、我が家にお迎えをします。

お盆の間はお膳を用意し、供養します。特別に供え物を準備し、家族同様一日三回、ご先祖に供養します。特別なお客さまをもてなすのとおなじです。

特に私の地方では、自分の家のご先祖のお祀りの他に、無縁さんといって縁側の片隅に別の棚を準備して、供物を用意しお花やお灯明をお供えします。



▲精霊棚の飾り方の一例。

●墓参・棚経

お盆の風習は各地さまざまですが、私のところでは八月の初旬にまずお墓のご回向を勤めます。お参りの日までに家族総出でお墓の掃除をします。夏は草も生えやすく大変ですが、ご先祖のお住いを皆できれいにします。お参りの日には親族が集まり、こぞってお墓にお参りします。どうぞお盆には我が家へお帰り下さい、と挨拶するような感じです。お墓では、普段は故郷を離れて暮らしている方が久し振りに顔を合わせて昔の話をされる光景をよく目にします。

お盆には、棚経といって各家々に菩提寺の僧侶がお参りします。少し前までは「お盆にはご先祖さまがお帰りになるから必ず家にいます」というお宅ばかりでしたが、昨今は「この時期しか家族そろって出かけられないからお参りは違う日にお願いしたい」というお宅も見うけられます…。

家に上がりお仏壇の前でお参りをはじめると、居合わせた家族・親族の方々が後に座り、一緒にお参りされます。大半のお宅では一緒にお参りいただくのですが、中には残念なことにおばあちゃん以外はみんな別の部屋へ行ってしまうお宅や、隣でテレビの高校野球をつけっ放しというお宅もあります。親御さんが子供たちを呼び集め一緒にお参りする姿があると、何となく安堵します。

▲施餓鬼法要では、施餓鬼壇の周りに五色の旗を立て、導師が餓鬼に食物を施す作法をする。

●施餓鬼法要

お盆が終わると今度はご先祖をお送りし、お帰り頂くことになります。家の門から少し出た所で送られている風景をよく見かけます。精霊流しや灯籠流し、大文字の送り火などもご先祖をお送りするしきたりです。

またお寺によってはお盆行事の一環として、万霊を供養する施餓鬼法要が営まれることもあります。施餓鬼はご先祖の供養のほかに、「迷いの世界に落ちているかもしれない多くの精霊を供養し、その功徳によって我々も仏の世界に生きることができるように」との思いをこめて勤めるものです。

お盆のしきたりはその場所ごとでさまざまですが、年に一度自分の命の源のご先祖を家族そろってお迎えし、後々の代に受け継いでいきたいものです。